

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 佐野 馨

論 文 題 目

アキレウスの死後の物語の変遷における『イリアス』の
意義について

論文審査担当者

主査	名古屋大学准教授	吉武 純夫
委員	名古屋大学教授	周藤 芳幸
委員	名古屋大学教授	滝川 睦
委員	名古屋大学准教授	川本 悠紀子
委員	国際基督教大学教授	佐野 好則

論文審査の結果の要旨

【本論分の概要】

本論文は、アキレウスの死後の物語を取り巻く複雑な状況を整理し、その中で『イリアス』が占める位置を明らかにしてアキレウスの死後の物語の形成に果たした役割を考察することを目指したものである。『イリアス』では彼の死の運命が再三予言されるものの、彼の死後については一切語られていない。『オデュッセイア』においても、彼は冥界の憂鬱の中で暮らす者として寸描されるのみである。これに対しホメロスより後の文学においては、彼は浄福者の島などで幸福な死後を送るという話型が殆どを占めている。アキレウスの物語は口承叙事詩の伝統の中ではるか以前から語り継がれていたものであるが、現存最古作品である『イリアス』が成立した当時、彼の安楽な死後を描く話型はすでに存在していたのか、という難しい問題がある。本論文は特にこの問題に対して、英雄霊崇拜(hero cult)の興隆に着目し、『イリアス』において *hērōs* という語がいかにかに用いられているかを分析することにより、一定の答えを与える。

本論文の第1章は、アキレウスの死後を語るローマ時代までのギリシア語で書かれた16の物語を概観した上で、類例の多い楽園行き話型をホメロス以前から一貫した基本形であると断定する Burgess の問題点を指摘する。

第2章では、ギリシア文学の中で語られるアフターライフの様々な形を概観し、古い時代の叙事詩においては「冥界へ行くこと」と「楽園へ行くこと」とが互いに相容れないこととされていたという事実を見出す。また、英雄霊となって崇拜され人々に影響力を持つという形は、一旦死んだ人間が辿るべき道であることが示される。

第3章では、死んだにも拘わらずアキレウスが楽園に行くという話型が前7世紀に最初に語られて以降、古典期に至ると彼は死後の楽園行きの代表的人物と言えるほどになるが、それは当時秘儀宗教が隆盛しつつあったことと関係していると指摘する。また、『イリアス』成立の頃にもアキレウスに特別なアフターライフの話型があったとすれば、考えるのは英雄霊になるという形であると判断し、彼の英雄霊崇拜はいつまで遡ることができるかを新たな課題とする。しかし考古学的研究では前7-6世紀のことまでしか分からないことから、他のアプローチの必要性を指摘する。

それをうけて第4章は、『イリアス』のテキストにおける英雄霊崇拜の影を探る。ホメロスにおいて *hērōs* の語は、特別な人物でなく一般的な戦士を表すに過ぎないが、この語をアキレウスに適用することは極力避けられているという事実を指摘する。そのことは、この語とアキレウスには特別な関係があったことの証左であり、英雄霊という形の特別なアフターライフをアキレウスが得るという話型が、『イリアス』成立時にはある程度の勢力を持って存在していたと理解することができるかと主張する。

第5章では、『イリアス』は特別なアフターライフを全否定し、アキレウスがあくまで普通の人間として死ぬ姿を描いたが、却ってそれが後に、死んだ人間も楽園に行くことがありうるというアフターライフ観が醸成する出発点ともなった、と結論する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文の特徴は、アキレウスの安楽な死後を描く話型が『イリアス』の成立時から存在していたか否かという、手掛りの極度に乏しい難問に対する論者のひたむきな探求心と、論理性と巧みさを兼ね備えた手堅い議論の運びと、それがもたらす独創的な成果である。論者はまず第2章で、古代ギリシア文学におけるアフターライフ観を丹念に調査する中で、主にヘシオドス『仕事と日』のテキストをもとにして、ヘシオドスまでの古い叙事詩においては「死ぬこと」と「楽園へ行くこと」とがオルタナティブをなしていたという「原則」を発見する。そしてこれが、2つの重要な議論の展開を導く。

論者はそこから、前7世紀に成立したとされる『アイティオピス』においては死んだアキレウスが楽園に運ばれたということが、それまでの原則に対する逸脱であることを見抜くとともに、それ以降その話型が連綿と続くことから、これは単に詩人たちの意匠によるものではなく、新しい宗教的潮流に影響されたものであるという妥当な推論を得た。これも論者のオリジナルな功績である。

そしてさらに論者は、かの原則から、死ななくてはならない人物であったアキレウスが楽園に行くという話型は『イリアス』成立時には存在しえず、もし彼が特別なアフターライフを享受するという発想があったとすれば、それは死んだ後に英雄霊となるという形が、考える唯一の可能性であると判断することができた。そして *hērōs* という語に着目すると、『イリアス』がこの語をアキレウスに適用することを避けているという注目すべき事実を発見した。そこから、『イリアス』のこの振舞いは、彼を英雄霊として捉えようとする当時の動きに対抗したものであった可能性がある、と論証した。第4章において展開されたこの緻密な議論は十分な説得力を備えたもので、日本西洋古典学会での発表でも高く評価された。

本論文の独創性は以上に述べたとおりであるが、そのほかにも評価すべきは、口承詩論や韻律論など、ギリシア叙事詩を研究する上での先行研究をよく踏まえた議論を行なっているということである。また、『イリアス』を単体として捉えるのではなく、アキレウスの物語の歴史およびギリシア人の死生観という大きな枠組みの中にこれを捉えて位置づけようとしたところに、研究のスケールの大きさを見ることができる。

ただし、本論文に短所もないわけではない。議論の緻密さにばらつきがあり、特に第3章の英雄霊崇拜の史実についての議論が中途半端であることが指摘された。パウサニアスやストラボンのテキストに全く触れていないのは不注意というほかない。また秘儀宗教についてもデメテル讃歌しか参照していないのは片手落ちである。とはいえ、これらは本論文の中心的な議論にさほど影響を与えるものではない。今後の注意点として銘記されるべき事項である。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士(文学)の学位を与えるのに相応しいものとして判定した。